

2024年度  
入学試験問題

国語

【注意事項】

- 試験時間は50分です。
- 問題は1ページから11ページまであります。
- 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 問題用紙と解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。
- 設問に字数制限がある場合には、句読点・記号も字数に数えます。

受験 番号						氏名	
----------	--	--	--	--	--	----	--

宝仙学園中学校共学部 理数インター

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

他の地域と同じく、アラスカの地域社会も外からの揺さぶりを何度も経験はしてきた。エスキモー社会がそうした波にさらされた一大事件は、おそらく百年前、十九世紀末から二十世紀にかけて浮上した<sup>①</sup>「エスキモーをトナカイ牧畜民に仕立て上げる」プロジェクトだったはずである。

アラスカには、シベリアと大きく違うところが一つあった。シベリアでは、トナカイの群れを飼い、連れて移動する暮らしが生まれ、多くの民族が牧畜民（飼育民）となったが、家畜を飼う生き方は、アラスカ側には全く広まらなかった。アラスカの伝統は、一つには野生トナカイ「カリブー」の狩猟であり、もう一つは、クジラやアザラシ、セイウチといった海獣の猟であり、東南アラスカではサケやタラの恵みも大きかった。もちろんペリーを摘むとか、野草や貝を取るといった採集活動も、暮らしを支えてきた。

I、ベーリング海峡を挟んで、アラスカ側の先住民族は狩猟採集を旨とし、シベリア側の先住民族は主としてトナカイを飼育して、異なる形で生きてきたのである。

ところが、十九世紀から二十世紀への時代の変わり目に、アラスカの教育長官シエルダン・ジャクソンが「狩猟採集より牧畜の方が安定しているから、エスキモーに牧畜を覚えさせよう」と思いついた。白人の乱獲でエスキモーが食糧源としてきたクジラやセイウチが数を激減させていたから、食料を確保させることが第一の目的として掲げられた。だが、もう一つ隠された意図が計画にはあった。

② 「エスキモーを教化し、文明化する」

社会ダーウィニズムの信奉者だったシエルダン・ジャクソンは、文明は狩猟採集から牧畜を経て、農耕、工業社会へと進むと疑っていなかった。だから、エスキモーがトナカイを飼うことは、文明への階段を一つ上ることになると信じていた。予算が付くと地球の裏側、ノルウェーやスウェーデンにまで部下を送り出し、サーミ民族の牧夫をアラスカに移住させる説得にかかった。アラスカへの移住は、土地や国境線をめぐるときに嫌気がさしていたサーミ側にも悪い話ではなく、一八九四年の第一陣に続いて、一八九八年には移住者百十三人、トナカイ五百三十九頭がアラスカに上陸した。

II、シエルダン・ジャクソンの意に反して、エスキモーたちは無言の抵抗を示した。「飢えていたはず」だったにもかかわらず、彼らは進んで牧畜民になるどころか、生き物を「飼う」生活に見向きもしなかったのである。シエルダン・ジャクソンはあの手この手を尽くして誘いをかけたが、見習い探しにも最後まで X するありさまだった。

誤算は、シエルダン・ジャクソンが、牧畜民と狩猟採集民の違いを単に「獲るか飼うか」だけの差と考えていたところにあった。

狩猟採集民の暮らしには、獲物が獲れたり獲れなかったりと、確かに不安定さがつきまとう。だが、生きる上の基本理念は仲間と協力し合って獲物を獲り、獲物が獲ればそれをみんなで分け合うところにある。

それに対して、砂漠や乾燥地帯、高原やツンドラといった豊かさとは無縁の土地を主舞台としてきた牧畜民の暮らしは、厳格さや辛抱を基本とし、自制と戒律を重んじる。牧畜民の暮らしは安定はしているが、一方で質素儉約を旨とし、その生活は孤独に満ちている。一つの群れをほとんど一年を

通じて牧夫が一人で、あるいは家族で追っていくのが牧畜の基本だからだ。

Ⅲ、トナカイは移動を必要とする生き物だから、牧畜をなりわいとする彼らの生活にもまた移動がつきまとう。トナカイは暑さに弱い動物で、蚊などの虫にも悩まされるから、夏は風の強い海岸線や海岸沿いのツンドラ地帯が好適地となり、冬までに、こんどは雪の少ない森に向かわなくてはいけない。そこではトナカイゴケが主たる餌になるが、コケは一年に三、四ミリしか成長しないから、食べ尽くさないように、森の中でもとにかく頻繁に移動しなければならない。「所有」の考え方をしっかりと持っているのも、牧畜民の特質である。自分のトナカイは自分の持ち物であり、相手のトナカイは侵してはならないものである。あるいは移動する先々で、水を利用する権利だとか牧草地を活用する優先権といった「権利」や「支配」の感覚も強く持ち合わせている。ところがそれは、蓄えや所有という明確な考えを持たない狩猟採集民にとっては、「Y」で「了見が狭い」生き方としか映らない。

つまりは、<sup>③</sup>牧畜は、生きる原理そのものが狩猟採集とは根本的に違っているのだ。

天上の唯一絶対の神、例えばキリスト教やイスラム教の神は牧畜社会から生まれたとされる。一方、狩猟採集民にとっては、山や火や雷、ヒグマ、オオカミなど自然や自然現象のありとあらゆるものが、敬うべき神々になる。見方を変えれば、自然から独立し、自然の恵みを必要とせず、自らの力量と才覚と辛抱で活路を見出してきた牧畜民に対して、狩猟採集民は自然に依存し、自然を畏れ敬いながら一体化する生き方を実践してきたのである。

イヌイットおよびエスキモーの村では、子供も集落全体で養っているような感覚がある。大人も子供も、とにかく朝昼晩、互いに訪ね合い、そこには全く遠慮というものが無い。プライバシーはない。が、他者が常に自分の周りにいることが水や空気のように身に染みつき、他人がいることで心が満ち足り、気持ち安定する……。そんな世界に、彼らは生まれた時から浸っているのだ。

<sup>④</sup>こういう生き方をしている人たちが、ある日突然、「仲間や家族と別れて、一人トナカイの群れを牧草地から牧草地へと移動させる暮らしをしろ」と言われて、果たしてできるだろうか。したいと思うだろうか。アラスカの教育長官シエルダン・ジャクソンの誤算はまさにそういうところにあった。エスキモーの牧畜民化政策がもしも成功にこぎつけていけば、おそらくはアラスカの自然や風景も今とは違ったものになっていったことだろう。手つかずの大地は放牧地に変わり、魚や海獣、陸の動物を育てられる海や川、手つかずの大地の存在も重きを置かれなくなっていたに違いない。何より、人々の意識そのものが変わっていたことだろう。自然との共存、大地の恵みへの感謝、そういった気持ちが薄らげば、野生動物保護区などの解除もやりやすくなる。エスキモーをはじめアラスカの先住民が、その後持ち上がる開発計画に抵抗を示すこともなかったかもしれないのだ。

（小坂洋祐・大山卓悠『星野道夫 永遠のまなざし』一部改変）

問一 本文中の I Ⅲ にあてはまる言葉として適当なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ア しかも      イ あるいは      ウ つまりは      エ ところが

問二 傍線部①「『エスキモーをトナカイ牧畜民に仕立て上げる』プロジェクト」について、これを説明した次の文を読んで、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。

アラスカの教育長官シエルダン・ジャクソンは、①を生業とし、②習慣がなかったアラスカの先住民民族であるエスキモーたちに牧畜を覚えさせようとした。このプロジェクトが発案された背景には、③という考え方があった。

- (1) ①・②にあてはまる言葉を、①は四字、②は五字でそれぞれ本文から書き抜きなさい。

(2) ③にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 牧畜より狩猟採集の方が、快適に生活できる  
イ 牧畜より狩猟採集の方が、争いごとが起きにくい  
ウ 狩猟採集より牧畜の方が、資源の節約につながる  
エ 狩猟採集より牧畜の方が、暮らしが安定する

問三 傍線部②「エスキモーを教化し、文明化する」とありますが、ここに見られる考え方として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 狩猟採集より牧畜の方が、知的な生き方と言える。だから、それをやろうとしないエスキモーの教育水準を高めることで牧畜の良さを教えてあげるべきだ。

イ 狩猟採集より牧畜の方が人間として高度な生活である。だから、それを知らないエスキモーに牧畜を教えることは人類の発展につながる良いことである。

ウ 狩猟採集と牧畜は種類こそ異なるが同じ農業の中の一つである。しかし、牧畜をして定住した方が、伝統を守り、地域社会を大切にすることにつながる。

エ 狩猟採集と牧畜は第一次産業であるという点は同じである。しかし経済的な豊かさは牧畜の方がはるかに上回るため、そのやり方を学ぶべきだ。

問四 本文中の **X** にあてはまる四字熟語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 七転八倒      イ 四苦八苦      ウ 一進一退      エ 七転八起

問五 本文中の **Y** にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア はで      イ やぼ      ウ けち      エ きざら

問六 傍線部③「牧畜は、生きる原理そのものが狩猟採集とは根本的に違っているのだ」とありますが、「牧畜民」の「生きる原理」としてふさわしくないものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分と他者の持ち物を明確に分けて考える。  
イ 質素で孤独な生活にも耐え得る。  
ウ 牧畜民どうしで共同して生きものを飼育する。  
エ ものごとの「権利」や「支配」に敏感である。  
オ 牧畜に適した牧草地を確保して定住する。  
カ 厳しい生活環境に耐える我慢強さを持つ。

問七 傍線部④「こういう生き方」とありますが、どのような生き方ですか。五十字以内で答えなさい。

二

次の文章は、筆者が父を思い出して書いたものです。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

父は身綺麗で几帳面な人であったが、靴の脱ぎ方だけは別人のように荒っぽかった。くつぬぎの石の上に、おっほり出すように脱ぎ散らした。客の多いうちだからと、家族の靴の脱ぎ方揃え方には、ひどくうるさいくせに自分はないよ、と父の居ない時に文句をいったところ、母がそのわけを教えてくれた。

父は生れ育ちの不幸な人で、父親の顔を知らず、針仕事をして細々と生計を立てる母親の手ひとつで育てられた。物心ついた時からいつも親戚や知人の家の間借りであった。

履物は揃えて、なるべく隅に脱ぐように母親に言われ言われして大きくなったので、早く出世して一軒の家に住み、玄関の真中に威張って靴を脱ぎたいものだと思っていたと、結婚した直後母にいったというのである。

② 十年、いや二十年の恨みつらみが、靴の脱ぎ方にあらわれていたのだ。

そんな父が、一回だけ威勢悪くシヨンボリと靴を脱いだことがある。戦争が激化してぼつぼつ東京空襲が始まろうかという、あれも冬の夜であった。

カーキ色の国民服にゲートルを巻き、戦闘帽の父が夜遅く珍しく酒に酔って帰ってきた。酒は配給制度で宴会などもう無くなっていた頃だったから、闇の酒だったのかも知れない。灯火管制で黒い布をかけた灯りの下で靴を脱いだ父は、片足しか靴をはいていないのである。

近くの軍需工場の横を通ったところ、中で放し飼いになっている軍用犬が烈しく吠え立てた。犬嫌いの父が、  
「うるさい。黙れ！」

とどなり、片足で蹴り上げる真似をしたら、靴が脱げて工場の中へ落ちてしまったというのである。

「靴のひもを結んでいなかったんですか」と母が聞いたら、

「間違えて他人の靴をはいてきたんだ」

割れるような大声でどなると、そっくりかえって奥へ入って寝てしまった。たしかにふた回りも大きい他人の靴であった。

翌朝、霜柱を踏みながら、私は現場に出かけて行った。犬に吠えられながら電柱によじ登って、工場の中をのぞくと、犬小屋のそばに靴らしいものが見える。折よく出てきた人にわけを話したところ、

「娘さんかい。あんたも大変だね」

といいながら、中からボンとほうって返してくれた。犬の噛みあとがあったが、もともとかなり傷んでいたから大丈夫だろうと思いながらうちへ

帰った。それから二、三日、父は私と目があっても知らん顔をしているようであった。

「啼なくな小鳩よ」という歌が流行はやった頃だから昭和二十二、三年だろうか。

父が仙台支店に転勤になった。弟と私は東京の祖母の家から学校へ通い、夏冬の休みだけ仙台の両親の許へ帰っていた。東京は極度の食糧不足だったが、仙台は米どころでもあり、たまに帰省すると別天地のように豊かであった。東一番丁のマーケットには焼きがれいやホッキ貝のつけ焼の店が軒※をならべていた。

当時一番のもてなしは酒であった。

保険の外交員は酒好きな人が多い。配給だけでは足りる筈もなく、母は教えられて見よう見真似で※ドブロクを作っていた。米を蒸し、ドブロクのもとを入れ、カメの中へねかせる。古い※どてらや布団を着せて様子を見る。夏は蚊にくわれながら布団をはぐり、耳をくつつけて、

「A……………」

と音がすればしめたものだが、この音がしないと、ドブロク様はご臨終ということになる。

物置から湯タンポを出して井戸端いどばたでゴシゴシと洗う。熱湯で消毒したのに湯を入れ、ひもをつけてドブロクの中へブラ下げる。半日もたつと、

ところが、あまりに温め過ぎるとドブロクが沸いてしまつて、酸っぱくなる。こうなると客に出せないで、茄子なすやきゅうりをつける奈良漬の床にしたり、「子供のドブちゃん」と称して、乳酸飲料代りに子供たちにお下げ渡しになるのである。すっぱくてちよつとホロつとして、イける口の私は大好物であった。弟や妹と結託して、湯タンポを余分にほうり込み、

「わざと失敗してるんじゃないのか」  
と父にとがめられたこともあった。

客の人数が多いので※酒の肴さかなを作るのも大仕事であった。年の暮など夜行で帰つて、すぐ台所に立ち、指先の感覚がなくなるほどイカの皮をむき、細かく刻んで樽たるいっぱい塩辛をつくつたこともあった。※新田切り換えの苦しい家計の中から、東京の学校へやつてもらっている、という負い目があり、その頃の私は本当によく働いた。

働くことは苦にならなかつたが、嫌だつたのは酔っぱらいの世話であつた。

仙台の冬は厳しい。代理店や外交員の人たちは、みぞれまじりの風の中を雪道を歩いて郡部から出て来て、父のねぎらいの言葉を受け、かけつけ三杯でドブロクをひっかける。酔わない方が不思議である。締切の夜など、家中が酒くさかつた。

ある朝、起きたら、玄関がいやに寒い。母が玄関のガラス戸を開け放して、敷居に湯をかけている。見ると、酔いつぶれてあけ方帰つていった客が※粗相した吐瀉物としゃぶつが、敷居のところいっぱい凍りついている。

玄関から吹きこむ風は、固く凍てついたおもての雪のせいか、こめかみが痛くなるほど冷たい。赤くふくれて、ひび割れた母の手を見ていたら、急に腹が立ってきた。

「あたしがするから」

汚い仕事だからお母さんがする、というのを突きとばすように押しつけ、敷居の細かいところにつまんだものを爪楊子で掘り出し始めた。保険会社の支店長というのは、その家族というのは、こんなことまでしなくては暮してゆけないのか。黙って耐えている母にも、させている父にも腹が立った。

気がついたら、すぐうしろの<sup>※</sup>上がりがまちのところに父が立っていた。

手洗いに起きたのだろう、寝巻に新聞を待ち、素足で立って私が手を動かすのを見ている。

「悪いな」とか「すまないね」とか、今度こそねぎらいの言葉があるだろう。私は期待したが、父は無言であった。黙って、素足のまま、私が終るまで吹きさらしの玄関に立っていた。

三、四日して、東京へ帰る日がきた。

帰る前の晩、一学期分の小遣いを母から貰う。

あの朝のこともあるので、少しは多くなっているかと数えてみたが、<sup>⑤</sup>きまりしか入っていなかった。

いつも通り父は仙台駅まで私と弟を送ってきたが、汽車が出る時、ブスツとした顔で、

「じゃあ」

とたっただけで、格別のお言葉はなかった。

ところが、東京へ帰ったら、祖母が「お父さんから手紙が来てるよ」というのである。巻紙に筆で、いつもより改まった文面で、しっかり勉強するように書いてあった。終りの方にこれだけは今でも覚えているのだが、「**B**」<sup>⑥</sup>という一行があり、そこだけ朱筆で傍線が引かれてあった。それが父の詫び状であった。

(向田邦子『父の詫び状』一部改変)

(注) ※ 間借り……お金を払って他人の家の一室を借りること。

※ 戦争……太平洋戦争。一九四二(昭和一六)年二月～一九四五(昭和二〇)年八月。

※ 国民服……太平洋戦争中に使用された、日本国民男子の標準服。

※ ゲートル……脛の部分に巻く布や革でできたもの。

※ 配給制度……戦争中、不足がちな物資を国が管理し、国民に配る制度。

- ※ 闇の酒……密かに売買された酒。
- ※ 灯火管制……戦争中、照明の使用を制限すること。
- ※ 軍需工場……兵器・爆薬・航空機など戦争に必要な物資を生産・修理する工場。
- ※ 軒をならべて……多くの家がぎっしりと建ち並ぶ様子。
- ※ ドブロク……発酵させただけで漉す工程を経ない酒。
- ※ どてら……綿を厚く入れた袖の広い着物。
- ※ 酒の肴……酒を飲む際に添える食べ物。
- ※ 新円切り換え……一九四六（昭和二一）年、国が新しい紙幣（新円）を発行し、従来の紙幣流通を停止させた政策。
- ※ 粗相……不注意や軽率さから過ちを犯すこと。
- ※ 上がりかまち……玄関の靴を脱いで上がるための横木。

問一 傍線部①「言われ言われして」のここでの意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 言われ続けて      イ 強く言われて      ウ 言われ慣れて      エ 言われ放題で

問二 傍線部②「十年、いや二十年の恨みつらみ」とありますが、「父」のどのようなことに対する「恨みつらみ」ですか。五十字以内で説明しなさい。

問三 傍線部③「あれも冬の夜であった」とありますが、このエピソードの中で、冬を表す表現を、本文から二字で書き抜きなさい。

問四 傍線部④「父は私と目があっても知らん顔をしているようであった」とありますが、なぜ「知らん顔」をしていたのですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 靴を片方なくしてしまったのに、家族がそのことをなじるので、ふてくされているから。
- イ 娘がわざわざ靴を見つけ出してきたことに対して、腹を立てているから。
- ウ 靴を片方なくしたことが恥ずかしくて、自分自身早く忘れようとしているから。
- エ 普段の自分の言動にそぐわないことなので、気まずくて、ふれて欲しくないから。

問五

A に入る、最も適当な表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア キンキン
- イ ゴソゴソ
- ウ プクプク
- エ グツグツ

問六

傍線部⑤「きまり」とありますが、ここでいう「きまり」とは何ですか。説明しなさい。

問七

B に入る、最も適当な表現を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 父様の仕事は多忙なり
- イ 今度のことはごめんね
- ウ もっと母様の手伝いをせよ
- エ 此の度は格別の御働き

問八

筆者の、本文における「父」に対する心情として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家長として威厳高く振る舞い、面と向かって素直に言葉を表せなかった「父」を、懐かしく思い出している。
- イ 家長として威厳高く振る舞い、自分や「母」に対してわざときつい物言いをしていた「父」を、憎々しく思っている。
- ウ 「父」が、保険会社の支店長だったために、家族は色々と苦勞させられたと、苦々しく思い出している。
- エ 「父」が、家族に対して威張り散らしていたのは、子どものころの生活への恨みがあると、気の毒に思っている。

問題三は次のページから始まります。

三

次の①～⑤の傍線部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① モケイを組み立てる。
- ② ハイユウとして活躍する。
- ③ エイダンを下す。
- ④ 税金をオサめる。
- ⑤ 池につり糸をタらす。

四

次の①～⑤の傍線部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

- ① 首相が組閣する。
- ② 胸中を察する。
- ③ 利己的な考え方。
- ④ 意見を人に委ねる。
- ⑤ 言葉を省く。

五

次の①～⑤の□に漢字一字を入れて、対義語を完成させなさい。

- ① 拡大 | □ 小
- ② 困難 | □ 易
- ③ 順境 | □ 境
- ④ 偶然 | □ 然
- ⑤ 需要 | □ 給









宝仙学園中学校共学部 理数インター